

スポーツ方法 サッカーの授業

高津 勝

(2008年10月21日 実践交流会報告)

はじめに 配布資料の説明

今日はレジュメがありません。お配りした資料をもとに、出来るだけ生の形でみなさんに私のサッカーの授業のイメージをつかんでいただこうと思っています。

まず、資料について説明します。

(注：巻末掲載資料、1 - 大学 HP 参照、3、4、6は省略)

(資料1)「シラバス(スポーツ方法 (サッカー))」(2008年)。これは、2007年度と同じものです。

(資料2)「授業計画(2007年度)」これは、学期はじめに学生に渡しているスケジュール表。

(資料3)「グループノート・期末レポートの記載例」。かならずしも最優秀レポートというものではないけれども、プレーヤーとしてはかなり巧かった。その学生が作成したものです。

(資料4)「授業と学習に関するアンケート結果(授業評価)」(2007年度)。大していい評価じゃありません。

(資料5)「授業に関するアンケート」(2007年度)。運動文化エリアの年度末総括のために、今年の2月に私が教育部に提出したものです。

(資料6)「サッカー方法 受講者経験調査」(2008.4 調査)。これは、毎年4月の教室でのオリエンテーションのときに行っているサッカー経験やこの授業に関する希望調査で、今年度4月に実施したものです。

最後が(資料7)「スポーツ方法 (サッカー、1限)を受講しているみなさんへ」(2008年7月)と(資料8)「冬学期サッカー(火1)予定」(2008年10月17日)です。定年の年になって、急遽、今まで教師としてやってきたやり方が誤っていたのではないかと、思うような事に出くわして、今年の夏学期末から、授業展開の軌道修正をしています。この資料は、その事情を示しています。今日の資料は、以上の8点です。

. 授業のねらい

「シラバス」(資料1)に記載してあるように、方法 のサッカーでは、「コンビネーションを中心にしたゲーム展開をめざすとともに、チームづくり(グループワーク)を大切に、サッカーをするうえで組織・運営能力が大切であることを学ぶ」ことにしています。

チームづくりについては、チームとクラブは違うということを意識しながら、「おまえ達は似非サッカーをやっているんだ。本当のサッカーをやっているのではない。」ということを学生にはきっとわからせるということを課題にしています。「チームではだめだ。おまえらクラブをめざせ。」と盛んに言ってます。この報告の準備をされていて気づいたのですが、これまで、個々のテクニック、戦術に関しては教えようと努力してただけけれど、どういうふうにチームが形成されていくのかということについて、きちっとした視点をもったアドバイスはしていなかった。チームづくりの指導は、不十分であった。技術については教え込みのサッカー、チームづくりについては形式的な点検だけで、実際には放任。そして、年間の授業の展開について教師の予定どおり進行させる、そういう授業をやっていたということを改めて思いました。今年は、遅まきながら、その点を改善したいと思っています。

なお、「コンビネーションプレイを中心にしたゲーム展開」ということについては、それに必要な練習方法と組織的能力を習得することにしています。具体的には、そのためにパスミス無くす、50%以下にする。さらに、意図的な攻撃をするために、3つ以上連続してパスを通すことを重視する。そのことによって試合中、コンビネーションプレイからのシュートを組み立てられるようになることをめざします。そこから、学

び合いを重視し、各自のテクニックやパフォーマンスの前提をなすチームづくりにつなげていく。

以上は、みなさんのスポーツ方法に関する理解と共通することであると思います。ただし、以下の点は若干異なっている。私なりのスポーツ方法の解釈ですが、社会学的な認識の形成ということ、スポーツ方法でも出来ればやりたい。たとえば、サッカーの歴史や欧州クラブについての認識を深めるといった。実際は、雨の日にビデオを見せるということになるんですけど。こういう点も、意識的にやろうとしています。

・授業の計画と内容

(1) <コンビネーションとシュートの練習>

「授業の内容と計画」に関しては、「1.ミニサッカーから11人サッカーへ」ということで、ミニサッカー、要するに、少人数のサッカーから11人のサッカーへ発展させるという考えです。と同時に、既に述べたように、「あわせて、サッカーという文化の過去・現在・未来についても考えたい」と思っている。「2.技術・戦略」の練習としては、2人、さらに3人での攻防を軸に作戦を組み立てることをめざします。

学校体育研究同志会の場合は、コンビネーションとシュートの基礎練習では、基本的に、ディフェンスを置かない。2人对0人でのシュート、3人对0人でのシュート練習をやっている。私も、それをシュートのパターン練習として取り入れているんですけど。実際にこれをやらしたところ、経験者はやるんだけど、初心者はお後の方でじーっとして、ほとんど練習に参加しない。そういう状況が続きました。ですから、最初は、1920年代のアーセナルの監督やコーチが開発し、1960年代前半にクラマーが日本に導入した3人对2人、4人对2人でのオーソドックな守りと攻めの基本練習、つまり、2人、3人、4人での攻防というか、パス回しとボールを奪い合う練習を取り入れることにしています。

この練習によって、オープンスペースはどこか、どうしたらパスがもらえるように動けるのか、どこが死角でどこにパスが来ないのか、死角をのがれるためにどのように動くのか、2人、3人、あるいは4人での攻めというのは、原理的にどう違うのか、などということ学びます。これは、東京オリンピック前後に日本のサッカー界に導入された練習方法で、私も高校2年か3年ころに学んだ。そういう練習方法です。

そのあと、3人、あるいは4人でのシュートパターンを練習していく。これも実際やろうと思ったら大変な話で、それほどみんなが一生懸命やるというわけではない。ゲームをやるためには余り体を動かさない方がいい、ということで、そこそこにやる、という感じが多い。「やれ！やれ！」と鞭でしばかないと、なかなか私の思うようには動かない。そういうことを、これまで、ずっとやってきたんじゃないかと思っています。攻防のフロアバランスを学ぶといっても、練習としてそれ自体を取り出すのは難しい。速攻と遅攻、これも同じです。マンツーマン・ディフェンスとゾーン・ディフェンス。これも、練習方法として固有に取り出すのはなかなか難しい。だから、ゲームのなかでいろいろと指摘していく、という形になっていきます。

(2) <チームづくりとグループノートの指導>

シラバスの「授業の内容と計画」の欄に、「3.皆と協力しながらチーム作り、練習しながら企画運営していく」という記載があり、より具体的に「練習計画の作成と実施」、「ゲームの企画・運営」、「ゲームや事故のテクニックの分析」と書いてありますが、ややもすると、机上のプランということになりかねない。レポートが提出されなかったり、グループノートが出てこなかったり。

その点では、サッカーの授業とテニスの授業では決定的に違うんですね。サッカーでグループノートを書かせるというのは、大変な苦勞がいります。テニスの授業は、グループの人数が少なく、コンパクトであるということもあるし、テニスコート自体がサッカーグラウンドと比べて狭いので、教師の声が通りやすい。サッカーの場合は、「お～～い」と怒鳴らないと、コミュニケーションがとれないということがあつた。東キャンパスの教員室から遠いということもありまして、学生がグループノートを出しにきて、それを指導することが出来ない。一時は、研究室に持ってこさせたんだけど、面倒くさくなって、止めてしまいました。

昨年は、授業中に作成させ、それを授業が終わった時点で受け取るという形にし、グループノートの提出という点では成功しました。でも、今年はそれをやらなくなった。とたんに、グループノートの質が落ちていく、という問題に出くわしました。テニスのグループノートとサッカーのグループノートでは、学生が書く字数も大きく違います。

なお、「4.雨天を利用して教室でサッカーの戦術や戦略、サッカーや欧州のスポーツクラブの歴史と現状についても認識を深める」ことをめざしています。

(3) <評価の方法>

評価はみなさんと同じで、7割以上出席したものを評価の対象にする。それを前提に、出席率と平常点を考慮し、さらに、期末レポートを重視します。期末レポートは、各自の担当したグループノート(学習の重点、前回の成果・課題、練習内容、班全体の成果・課題について記載)と雨天のとき教室で作成した小レポート、そして、最後の授業で作成する狭義の期末レポート(技術・戦術～チームの特徴と自分の役割・課題、チーム(グループ)の組織的特徴と成長過程、で構成)をパックにしたものです。

(4) <グループノート・サッカーの心電図・期末レポート>

サッカーの授業の場合は、テニスの授業と違って、グループノートを担当者が事前にきちっと提出するよう指導するのが大変です。授業の前日に提出されれば立派、という状況です。事前に出せばいい方。配布した別刷りコピーのなかに、6月1日(A君、担当)と11月27日(A・B両君、担当)の練習計画(グループノート)があります。これはよく出来ている方です。

それから、11月28日付けのパスの繋がりに関する調査。これをサッカーの心電図といいます。雨の日に教室で2006年のドイツ大会のフランスとイタリアの決勝を観戦し、そのうちの5分間について触球数やパスの繋がりを調べたものです。こういうかたちで、心電図が書けるようになることも、学力のうちだと考えています。これで見ると大体このゲームでいくと、パスミスが50%(フランス)から37%(イタリア)、フランスは余り良くなかった。プロでもこのぐらいなら、我々もこの水準をめざそうと。もっとも、2008年の欧州選手権のドイツとスペインの決勝では、スペインはパスの成功率が90%を超えている。困難だが、我々もこの水準をめざそうとということである。

フランスとイタリア戦のイタリアの場合、パスが3つ、4つとつながっている。4つ以上のパスは、つながりのパスというか、遊びのパス。3つ以上いくらパスをつないでも、シュートチャンスは逆になくなる可能性が多い。だけど、攻防のバランスということでは、大事なんです。チームのフロアバランス、あるいはパスを回しながらの余裕のあるキープ力ということでは、我々にはこれがない。これがプロとアマの決定的な違いです。3つ以上続くパスも結構多い。もっとも、フランスの場合は、結構攻められていて、余りいいパスは通っていない。我々の水準に近い。こういうかたちでやっています。

今年の7月17日は夏学期最後の日で、暑いから教室でやって、個人の技術の特徴とかチームの特徴や課題分析をさせて、ビデオを見て心電図を書き、感想を書かせました。雨で実技ができない日が多い年には、UEFAチャンピオンズリーグにおける商業化とそのコントロールを主題にした「にらみをきかずサッカー連盟」などのビデオを見せることがあります。このビデオを見た学生のなかには、商業化に驚く者もいれば、舞台裏が見えたという者もあり、マネーゲーム批判もあり、UEFAが商業化をコントロールしているのは素晴らしいという評価もある。教師には、これ以上どうつめるのか、という興味深い課題も残ります。

そうしたビデオ鑑賞は、スポーツ組織に関する社会認識を育てたいという意図によるものですが、そのことに関連して、期末レポートで「チームの組織的特徴と成長過程」というテーマについて書かせることにしています。ところが、ほとんどの受講生が、組織的特徴をコンビネーションプレイのことだと受け取っている。チームが組織化されていく過程を、社会的な集団形成だとは思っていない。私の指導のし方のまずさなんで

すが、コンビネーションプレイの成熟の過程と同一視している。ゲームをするためのチームが社会的な性格をもつものにならないと、つまり、組織がなければスポーツは成立しないんだという意識を培っていない。ゲームをプレイするための単位としてのチームは、人の集合であっても、かならずしも社会的な単位ではない、本物のクラブと違うんだ、似非クラブなんだということを自覚させていくことに成功していない。管理運営能力とか組織運営とか計画とかを重視するわりには、私の授業はそこまでしかいっていないんだ、ということ自覚させられました。

以上のような取り組みを経て、各自で作成したグループノート（練習計画）と、狭義の期末レポート（技術・戦術～チームの特徴と自分の役割・課題、チーム（グループ）の組織的特徴と成長過程について分析したもの）をバックにし、期末のレポートを作らせ、それと出席点を総合して、各自の成績を評価することにしています。

．実際の授業展開

（１）＜授業中のゲームの様相＞

今年の7月1日にビデオ撮りしたゲームをお見せしましょう。2回目の11人制のサッカーです。センターラインは引いていますね。ペナルティエリアも。タッチラインは引いていない。私は、ラインを引いていないサッカーのゲームはサッカーではない、という考え方です。ただし、全部ラインを引くと時間がかかるので、ペナルティエリアとハーフウェイを学生に引かせる。タッチライン上には、マーカーを置いてラインの代替にします。四隅にはコーナーフラッグを立てる。路地裏でサッカーをやっているという感じでなくて、サッカーのグラウンド内に入った瞬間、緊張感をおぼえるというような雰囲気です。

教師は、学生がラインを引くためにラインカーに石灰をつめますが、それがまた、一苦労です。

審判は、最初は私がやりますが、徐々に学生とか中村君にやってもらう。ラインズマンがいけないといけない。オフサイドも取る。出たか出ないかをはっきりさせないと、緊張のある、しまったサッカーにはならない。マソフトボールになってしまう。芝生のいいところは、フィールド内でボールが止まること。土のグラウンドだと、すぐに出てしまう。

ゲーム中の任意の5分間の触球数とパスのつながり具合を、心電図のようにメモって調べてみますと、ブルーのチームのパスミスが43%で、レッド・チームが56%です。FIFAワールドカップ・ドイツ大会決勝のイタリア対フランスなみの数値です。ボールをつないでパスを組み立てながらサッカーをやろうとしていて、パスミスは4割～6割弱です。

ポジションを決めていないので、誰がどこでボールを取り、どうプレイするのか、といった意思疎通は、まだ見られない。その辺は、なかなか難しい。ポジションを決めると、うまい奴中心になってしてしまう。そういうことは、今の学生はやりたがらない。前半はバックをやるけど、後半はフォワードをやるとか、ね。うまい奴でも、前半は出るけど、後半は出ないとか。教師からすると、ゲームメーカーは出ないとチームがまとまらないから、もっとリーダーシップをとってもらいたいのだが、昔と比べると、余り目立たない、自分の我を張らないという感じの学生が多くなっている。「和」を大切にする。

そのへんは、彼の「優しさ」と対決しないといけない、と思っている。つまり、ポジションをきちっと決めて、「おまえはこのポジションをやった方がいいチームになるんだ」、「いいチームプレイができるんだ」ということを要求する。みんなで同じように、楽しく、和気あいあいとサッカーをやる、という彼等のサッカー観との対決です。そうした傾向は、「パス回すことが究極のサッカーだ」といったげな今の日本のサッカーの反映かもしれないですね。「個人技に走らずパス回せ」とか、「フォーメーションを大切にせよ」とかいうことを指導することに関しては、今は何の苦もない。彼らも、それがサッカーだと思っている。

我々のゲームのもう1つの特徴は、パスミスは50%程度に抑えられるが、3つ以上つながるパスはほとんどない、4つ以上のパスはゼロ。つまり、パスを展開しながらボールをキープして、右に展開したり左に展

開したり、バランスとって組み立てながら遅攻型で攻めるというプレイがほとんどない、ということです。

(2) <ゲームの質的向上とチームプレイの深化>

昨年度の夏学期の授業は13回。冬学期は15回です。夏学期は、11人制のゲームは2回しかやらない。まず、ミニサッカーです。多くても、せいぜいハーフコートでチーム5人~7人のゲーム。初めから11人制やらせろという学生がいますが、私はやらせない。11人になると、一人一人の触球数が極端に減る。下手な学生は、20分間で2回くらいしかボールを触わない。これでは、うまくならないではないか、と。

昨年度の冬学期の授業は体慣らしからはじめ、シュート練習、徐々に班別自主計画をいれていきました。基本的には、15分ハーフで11人制の班対抗ゲームをしょっちゅうやる。そこに東西対抗を2回入れる。これは班対抗だけで行くと、サッカーのゲームがマンネリ化していくからです。ゲームを東西対抗という形に編成し直すと、いままで見たことの無いようなものすごいプレイやる学生を発見したりする。だから、班対抗だけでなく、メンバー構成を変えて、違うサッカーをやって、別の刺激を加えていく必要があります。

では、学生はどのような授業計画をたてているのか。多くは、それほど丁寧に記入していません。が、昨年の6月5日(7週目)のグループノートには、「4対2のワンサイドカット」とか、「三角パス」とか、「ワンタッチでやる」とか、「ディフェンスラインからの攻撃」とか、「数的有利」とか書いていて、私が言わなくても、基礎的なことはわかっているようです。

11月27日(第22週)になると、「スリータッチ」とか、「集団でボールを奪う」とか、「3本以上のパスをつなぐ」とか、「マークを固定する」とか、「サイドからの攻め」とか、「サイドからのスペースを活用する」、「声を出す」という課題を設定しており、チームらしくなっていることがわかります。12月11日(第24週)の場合も、「パス回しを考えてプレイする」とか、「カウンター攻撃はうちの特徴だからこれを生かす」という。加えて、「それに頼らず、中盤でじっくりボールをつないでいくという展開が必要だ」という指摘もあります。チームとしての体をなしている。

A君の期末の最終レポート(1月22日)には、チームの特徴として、「経験者が多いけど未経験者にもしっかりパスを回して全体でサッカーをするという意識があった」といっている。「11月頃までは、ポジショニングを決めずに流動的にやってたけど、メンバーのイメージが一致した日としない日ではゲームの内容にかなりの差があった。つまり、どういう攻めをするかというイメージを共有できるかどうかという部分に関して、違いがあった。ポジショニングを固定しないではイメージがつかめない。チームとしての攻め、高度なコンビネーションプレイが出来ない。」といている。このように、12月以降はボール回し、パス練習が主になっていく。「チームを固定するようになって、ポジショニングがある程度固定され、試合としての形がとれてきた」といっている。コミュニケーションというか、イメージの共有ということ、チームとして追求するようになる。授業が、この様になってきます。

(3) <授業の展開と残された課題>

もちろん、いいことづくめではありません。夏学期は異質集団で4班に分けてミニサッカーを主体とした授業を展開し、冬学期は2班を合同して11人制サッカーを展開していく。1コマ内のゲームの時間配分は、夏学期は3分の1がゲーム。冬学期は、3分の2がゲーム。けれども、夏学期の4班と冬学期の2班をどううまく絡み合わせるかということ、なかなかうまくいかない。課題です。練習方法の多様性の探究、フォーメーション練習の拡充、グループ活動のマンネリ化を防ぐことも必要です。受講生はパスを中心にしたコンビネーション・サッカーを支持しており、経験者も初心者に気を遣いながらプレイする、といいましたが、経験者と未経験者の溝の克服というのは、依然、課題として残っています。だから、おまえ達、2対1、3対1からやれ、シュートのパターン練習からやれ、と。実は、ゲームはやるけど、練習を実際やっているのは半分だけ。あとの後半分はただだらしゃべっている。そういう光景が、無いわけではないのです。

・授業改革 2008 年度冬学期の試み

(1) <ある学生の提言>

夏学期の最後の授業、教室でやりましたが、このとき渡辺という学生が「かったるいことやらないで早くゲームやろう」と言い出しました。年寄りが教室で御託を並べないで、外へ出てサッカーをやきましょう、という感じで。そこで、「じゃあ、おまえ、どんな授業をやりたいのか文書で書いてこい」といって、後日、提出させることにしました。それが(資料7)にある「練習計画案」です。これに私の「スポーツ方法 (サッカー、火1限)を受講しているみなさんへ」という鏡を付け、7月18日付けでスポーツ科学研究室のホームページに掲載し、他の受講者の意見を募ることにしました。

渡辺提案というのは、要するに「最初にゲームをやれ。授業の途中でミーティングとかチーム練習をやればいい。後半でまたゲームをやれ」というものです。私の場合は、初めに練習ありき。それに対し、こういう提案してきた。パスサッカーという私の信念に対し、彼はセクシーサッカーと言い換え、個人の独創性をより重視したパスサッカーをめざすという。そのために重要なのは(1)トラップ、パスなどの個人的な能力、(2)ボールをもらうための動きの修得、(3)チームでの「イメージ」の共有。「(1)に関しては、こんなの授業では無理だ。こんなの授業しかやってない者がうまくなるわけがない。うまくなるのはゲームでどう動くか、ゲームでボールをどうもらうということなんだ。即一番大事なものはゲームだ。実践。もちろん、ゲームだけやってもだめだから練習もする。ゲーム=練習=ゲームということで、練習は間にはさんでやればいい」と。私に対して、「審判しながら、誰がうまいか、分かる訳ないじゃないか。」「先週は、先生はうまい人を3名あげた。確かにうまいが、あの3人は出し手(中田)であって、受け手ではなかった。大事なのは受け手だ。先生はそれわかっているのか。」ということをしてるわけだ。「試合の前に練習やっているのは意味がない。数人しか先生の指示の練習していないじゃないか。だったら、もっと試合の時間を増やせよ」と。

つまり、この提案を読んで、私は自分のサッカーを教え込んでいる。初めに2-0あり3-0あり。3-1、4-2あり。ミニサッカーから11人サッカーへ発展させていくという、まず技術や学習の系統があって、それなしには授業は成り立たない。学生が白紙の状態です。授業に出て来るもの、と思っている。つまり、彼らにどのようなサッカー経験があり、どういう風なことをやってきたのか、ということをもとにして授業を展開するのではなく、これまで、私が理想としていたサッカーを学生に強制していたんですね。

その後、15名の受講生がホームページに掲載された渡辺提案に対して見解を寄せていますが、おおむね支持しています。そこで、「冬学期の課題は、<「チームづくり」から「自主的なスポーツ集団づくり」へ>です。練習計画の作成と遂行、ゲームの企画運営、チームづくり、授業全体の企画・運営への積極的な参加を希望します。」という私のメッセージをHPに掲載し、夏学期を終ることにしました。

(2) <受講生のサッカー経験や実態把握の重要性>

授業展開そのものは、冬学期は班対抗の11人制のゲームを中心に展開しますから、渡辺提案と大きく異なるものではありませんが、練習 ゲーム ゲームではなく、ゲーム 練習 ゲームであるという点で、授業の形式が変わりますし、その考え方、そして、なによりも、学生自身が選択し、決定した授業であるという点でこれまでとは大きく異なります。そのような授業展開を同意した背景には、彼等のこれまでのサッカー経験に関する信頼がありました。

たとえば、2007年4月に私が授業オリエンテーションのときに実施した受講生実態調査(資料5参照)によれば、登録人数、履修者とも40名。学部構成は、商:11人、経:10人、法:7人、社:12人。全学部に分散、学部を超えた交流というスポーツ方法の趣旨に相応しい構成になっています。高校までのサッカー経験は、部活経験者15名。そのうちのサッカー部活経験が75%を占めていて、4年間以上やった者が半数以上。大学でも、フットサルとかサッカーの部活やサークルに入りたいと希望している者が30%。つまり、サッカー経験は豊かで、大学でも、なんらかのかたちでサッカーと組織的に関わりたいと思っている者が多

いわけです。運動系、体育系のクラブに入ろうとする者が圧倒的に多くて、文化系希望者が少ない。3分の2が運動系サークルに入りたいといっている。

2008年度の経験・実態調査では、今年度受講生40名のうち、サッカー部経験者が3分の2いるわけです。しかも3年間以上の部活経験者が圧倒的。それに対し、テニスとかバドミントンの授業を履修する者は、初心者・初級クラスが多い。サッカー受講者の経験を、なぜ、もっと生かさないのか。そう思うようになりました。63歳になって、「やっとわかった」という心境です。

(3) <授業改革の取り組み>

そこで、「冬学期の授業、計13回(実際には最終日に教室でのまとめがあるので12回)おまえら好きにやれ。」という気持ちで授業を展開することになりました。ただし、目標はこれだと、と。つまり、「2008年欧州選手権におけるスペインとドイツのパスの成功率がスペイン81%、ドイツが76%。触球数をみたら1回のパスも2回のパスも4回もあるんだけど、おまえたち、これをめざせ。あとは好きにやってみろ」と。

第1週目終了後、翌週までにサッカー経験者を中心にゲームの構想と練習計画を作るよう指示。第2週目には、教師がやるより学生同士でゲームを作らせ練習を作らせていることの方がはるかにいいという結果がでた。種目選択を前提にしたサッカーの授業の場合、サッカー経験者が多数履修しており、そこでは日本のサッカー水準をベースにして授業を展開することが可能である。受講生のサッカー経験をどう生かすか、彼らのなかの自発的な能力をどう引き出していくか、これはやっぱり大事だということがわかった。これまで、私は、初めに2-0、3-1、4-2の練習をし、ミニサッカーから11人制サッカーへという、教師のプランを押しつける独裁的な授業をやってきたのではないかと、今日まで、学生の創造的な能力を發揮させることを阻害しながら、30年間やってきたかのではないかと、そのように思ったわけです。

中村君、この授業のTAをやっていて、今日(2008年10月21日)の授業の感想はどうですか。

(中村)「今日は最初にゲームをやって、その間に練習をはさんで、またゲームをやったんですけど、練習がかなり系統立ったことをしてた。赤チームは二つに分かれて経験者がツータッチでボールを回し、未経験者はスリータッチになりで経験者はうまく返すという形のパス交換、ボールの取り合いをやっていて、青チームは真ん中からボールをサイドに出して、サイドからあげたボールを最初の出し手がシュートする練習を自分たちで決めてやっていた。そのような系統立った練習は今までなく、作戦を考えて、自分たちで自発的にやっていたので、練習に対する積極性がこれまでとは一番違っていたと思う。今日一番感じたところです。」

以上で報告を終わります。

. 質疑応答

<授業のなかのスポーツと社会のなかのスポーツ>

尾崎：似非サッカーであることをわからせる、とはどういうことか。

高津：授業でやっているのはほんとうのスポーツではなく、体育であるということ。授業のなかのスポーツ集団というのは、社会的なスポーツ集団ではないということ。そのことを受講生に自覚させたい。時間が来ればちゃんとサッカーやれる。これは本当の社会的なスポーツではなくて、学校のなかに抱え込まれていて、そこに来ればサッカーが自動的にやれるという、そういうプログラムサービスを受けているに過ぎないから、その意味で似非サッカーであって、社会的なクラブの内なるスポーツではないという意味で言っている。要するに、社会的存在ではなく、授業のなかでの学習集団だよ、自主自立という意味からすれば括弧付きなんだよ、ということを言いたいから、似非サッカーと言っているんで、プレイにおける組織性のことをどうこう言うんではない。社会的存在形態から見ると、本当のスポーツではない。自分たちでコートを用立てたり、自律的に組織を管理運営していくという意味で言えば、たんにサービスを受けているんだよ、という意味。授業のなかのスポーツと社会のなかのスポーツの区別がきちんとわかればいいと思っている。出来れば連続

性を持たせたいが、サークルづくりとかクラブづくり自体をめざしているわけではなく、間接的にめざしているんで、ゴールを用立ててグラウンドを用意してコートを引き、整備して、自分でお金を出してもいいんだけど、それではなく、この授業のサッカーは、ちゃんとお膳立てがされているなかでやっているサッカーに過ぎないんだよ、と言いたい。

岡本：コンビネーションプレイと組織プレイについて。

高津：プレイの場面に限定すれば、同じ。チーム作りとコンビネーションプレイ作りとは違う。「チームの組織的展開と成長」についてレポートを書かせると、多くの学生が管理運営という形ではなくて、コンビネーションプレイがどうまくなったのかとか、戦術がどうまくなったのかということを書いてしまう。私は、そうではなくて、チーム作り、グループづくりということで組織の成長について書いてもらいたかった。

岡本：サッカーのコンビネーションプレイというのは、全体のフォーメーションがあって、うまく機能して、うまいところにパスがいくとか、そういうものですか。

高津：2人の、3人、4人のコンビネーションプレイを考えたら、その意味での流れも考えられるけど、ゲームをやらせるのは、それを順番に積み上げていくというのではなくて、ゲームというなかにコンビネーションプレイがあるという考え方。そこでどう動くかということ、走り方を理解していくのが実践的ではないか、というのが彼ら（渡辺たち）の主張だと思う。要するに、先生がいくら2対0、3対0を練習しろ、3対2をやれといっても、やらないではないか。彼のイメージしているのは、ゲームのなかでどうコンビネーションを、プレイを作っていくかという主張だと思っている。分習法でなくて全習法。私は、それでいいと思ったわけです。コンビネーションプレイといったときに二つの考え方がある。2-0、3-0とか、2人での攻撃とか3人の攻撃、4人の攻撃とかがありうる。そういう形のコンビネーションを考えていく。系統的に。それは理屈と形式、論理だよ。5対5を基本にしてゲーム考えてコンビネーションをどう作るか、11人对11人を基本に考えて、そこでコンビネーションをどう作るか。どう出発するか、そこが問題で、私の場合は系統主義で形式的・抽象的に今までやらせていた。それに対し、渡辺案は転換を迫ったわけだ。

<学生の自発性・自主性と指導の系統性>

上野：この30年の間にはなかったのか。つい最近なのか。

高津：あったんでしょうね。だけど少なくとも明確には意識してはいなかった。私の授業は、あえて夏は教え込み。冬はゲーム中心にしてやらせていたと思う。そこを、「かったるいじゃないか、ミニゲームなんてやらなくていいじゃないか」と突いてきた。そののところに私が気づいて、一番気づいたのは、ゲームを通して学ぶことが必要だと思ったのは、学生の経験。私よりも、彼等は現役なんだから。3分の1は。練習なんかは私なんかより最新式の練習を知っているはず。それをきちんと生かしていくというのが、つまり1920年代や1960年代のサッカーじゃなくて、今のサッカーをやる。サッカーの場合は、それが出来るということに気づかされたわけです。「社会のなかのサッカーと、大学の教育のなかのサッカーとは違うんだぞ、だめじゃないか、こんなじゃ、どうするんだ」と彼等は言って来たわけです、極端な言い方をすれば。「奴らはもっといいサッカーが出来る。もっと面白いサッカーをやらせることが出来る」と私は後悔したわけです。

内海：大学レベルで何を教えるのかという話で考えた場合に、高津さんは教え込みとってたけど、このレベルでの教え込みも必要ではないかと思うけど。

高津：それということも考えられるけど、私の場合は、やっぱり教え込まなくても彼らの持っているものをどう発展させるか、ということでもいいと思っている。

内海：バレーボールでいえば、後衛のいろいろなレシーブとかの技術を教える必要はない。限られた時間数のなかでの大学のバレーボールという授業では、むしろ、バレーボールの本質である攻撃というのを、彼らは高校までの授業で十分に教えられていない。レシーブというのは、攻撃水準に比例して伸びるから、あえて大学の授業でレシーブの時間をとる必要はないと思う。レシーブ力は付いていくということで、攻撃を焦

点化した授業をしているわけです。そういう点では、サッカーを考えたときに、20とかは形式的に重要なんだけど、今の彼らの水準からいうと、それはある意味でマスターしてしまっていることだと考えれば、基礎技術なんかをちゃんと教えればいいんじゃないかと思うんですけど。

高津：基礎技術を教えるとしたら、彼らが、これが基礎技術だと考えて系統立てていくのであれば発展性があるけど、教師がこれが基礎技術だといったら、受講生の3分の1しか動かない。その練習パターン、練習のやり方を教えるだけで、ものすごい大変な時間と労力がある。彼らが「これが基礎技術だ。よしやろう」と考えるのと、教師がこうだからやれというのでは全然違う。

内海：それだと、しめしがつかないのでは。それを示せない人は監督になれないのではないかな。いろんなフォーメーションも、バリエーションも、相手を想定しながらどういう課題で...

高津：それは、彼らがやっていくなかで、何が足りないかということを考えながらやっていくことで、コンビネーションができる。教師が初めから、これが足りないからこれをやれというんじゃないで、彼らが練習してこうやっていって組み立てていくなかで、もうちょっと足りないな、というのが出発点であり、基本だと思う。それは、全くラケットを握っていない学生には、ボールやラケットの握り方とか何とかは、教える必要があるかもしれない。サッカーの日本の水準からいえば、つまり、履修者の3分の1から2は、部活で3年から10年やっているわけだ。そういうやつの中には、ある意味では、理屈から言えば、テレビの解説者よりもいい解説するやつがいるわけだから。そういうやつをきちっと評価していくとか、如何に生かしていくかということの方が、学生のなかでの教師の意図の浸透とか影響力が全然違う。

<学生のスポーツ経験と自己形成力>

坂：今年度そういうことだったのか。

高津：私はやっぱり、これまで、上から学生を見ていて、「こういうことをやらせない」という考え方がどうしてもあって。今回、そのことを明確に意識した。

上野：この間の方法の授業、1年生の部活動の経験者が何人か、4~5人にはいたと思うんだけど、相当比率は高くなっているよね。この傾向はいつ頃からか。

坂：(データから)経験数が長いというのは、おそらくここ数年ですね。Jリーグ以降ですか。年代的なものを感じますね。10年前とは違う。生まれたときから、Jリーグがある。

高津：Jリーグ効果かもしれないが、こっちへ来て選択制になったというのが一番の理由。教師が指定した種目をやるのではなくて、彼らを選択して、この種目をやりたいということが第一に大きい。

坂：経験者年数がこれだけあるというのは、テニスとは違いますね。

高津：部活だから毎日やっている。

尾崎：テニスは6チームに分けて、2人いればいいかというところ。それでも比較的、選択制だから高いけれども、1チーム7~8人と考えて半数を超えるということはない。3人を超えることはない。

高津：はっきり言って、授業で高校の部活ぐらいのことはやれる。授業だけでやっているのが3分の1いるけど、これを遠慮してもらったらもう部活ですよ。けれども、そのところは、一緒にやることを、彼等はむしろ望んでいるわけだ。みんなと楽しくいいサッカーをやる。そこは問題ないんだけど、潜在的に彼らが持っているものというのは、そういう意味では一人一人のプレイをみていて、こいつはへたくそだな、このぐらいしかやれないとか、判断できるのだけれど、ところが、ゲームをやらせたら「アレッ」というやつが出てくる。ワンタッチ・プレイとか、これJリーグじゃん。そういうプレイが生まれてくる。いや、高校時代のプレイを思い出して再現する。しかも、初心者に教えることをする。だから、そのエネルギー、経験やる気というものを如何に生かしてやるか、ということが大切さと思ったわけです。サッカーに関しては...。テニスはちょっとちがう。そうはいかない。逆に、教師がやりやすい面がある。テニスの場合は、同好会のをどうコントロールするか、ということを考えれば、授業はうまくいく。だけど、そういうやつが、サッ

カーの場合はもっと多い。よく今まで、そういうやつを単位のせいかも知らないけど、抑圧していたんだなと。サッカーでは、そういうやつをもっと生かしたい。しかも、そういうやつは、どうやってみんなでサッカーを楽しむか、ということに気を配っている。優しい気持ちを持っている。

<練習のための系統か、ゲームのための系統か>

岡本：雨の日の授業で、このチームの課題はこういうことで、グループディスカッションさせましたか。

高津：あった。だけど、外からの指示だから育たない。私の今までのやり方だったら、育たない。学生に任せた今は、学生のなかからリーダーが育っていく。そいつらがどういう風にやりたいか、話し合う。

岡本：最初にゲームをやって、そこでチームの課題というものが共有化されると考えればいいのか。

高津：基本は、11人制をやるなかで、逆にミニサッカーが必要だというように持って行くのが、いいんだろうね。彼らのなかから意識させていくという。私はミニサッカーから11人サッカーだというルートを作っていたんだけど。11人制サッカーをやって、チーム作りをするなかで、こうやるためにはミニサッカーがいいんじゃないか、という形で、彼らのなかからやらせていくのがいいんじゃないかというように考え始めた。私はやっぱり権力者で、サッカーというものはこういうもので、こうやればうまくなるんだ、ついて来い、というような面があった。「なぜ動かないんだ」ということがあったりした。自己運動をどう起こしていくということ。それ無しには、指導は入らない。

坂：練習計画のなかで、体慣らしをして、2-1、3-1とあって、その後、班別自主計画があるんですけど、班別じゃないところは全体で練習をするんですか。班別じゃないところの練習方法は。

<グループ活動とコミュニケーション>

高津：全体のテーマ、課題があって、班のなかでわかれてやる。班は20人。かなり大きい。20人をどうたばねるかは大変。計画は学生に前もって提出させるようにするが、その日にもって来る者のもいる。自主練習に関しては、自分たちに何が足りないか考えさせ、シュート練習が足りないということになればシュート練習をする。グループノートの精度は、テニスとは全然違う。サッカーをやっている人は、いちいち、詳しくは書かない。部活でわかる、というのがあってではないか。私の思いこみ過ぎかもしれないが...

尾崎：テニス、バドミントンは、取りあえず個人で完結する。サッカーは、どんなに自分がいいパスしてもだめなことがある。

高津：グループの人数が多いと、コミュニケーションとか話し合いとかが本当はなり立っていないかもしれない。1チームに20人とかいたら、15人でもそうだけど、どうやってなり立たせるか、苦労する。ミーティングをしても、1人が1分話しても20分必要になる。実際は、そうはならない。ノートの個人欄を書こうとして、順番に回していただくだけ、だから、なかなか議論にはならない。学生にそれ以上の能力や責任を求めるのは、酷な気がする。だから、全員でないにしても、何人かでミーティングをやっちゃう。

岡本：最初にゲームをして、そして見えてきた課題を達成させるための練習というものをやって、その後にそれをゲームに生かすということか。

高津：そこまではうまくいっていない。前週の試合の経験をどう生かすか、というのはある。

岡本：いままでは我々がやっているパターンもそういうことで、授業の最後まで練習をして、最後にグループノートを書かせて、そこで出てきた課題というのを次の回の練習に生かして、練習してゲームをやらせて。その繰り返しをしている。最初にゲームをして、そこで見えてきた課題を練習に反映させて、そして練習、というのは、全く今まで発想してこなかったもので、そうすると、今までのグループノートのあり方を考え直さなくてはいいけないのかなという気になりました。

高津：そこまでまとめてくれたらありがたいけど、私の場合は、学生がちゃんと練習をやれば十分ということ。今までは全員でそれほど真面目にはやらなかった。「これをやれ」と教師がいても、ただ見ているだけ

のやつがいる、経験者はやるが、他のやつは立って見てるだけ。他の3分の1は、1回蹴るかどうか。

坂：バドミントンも、見てるだけの者はいる。バスケの場合も、経験者が非常に多くて、ミニバスケからやってるといふ学生が多いんですが、そういう風に集団が小さくて、体育館が小さいのでコミュニケーションがとりやすいということもある。なぜその違いが出てくるのか疑問。

<学習集団と種目の特性>

上野：体育館は狭いからだ。教員がゲームを見るのは、どこの場所で見えるのか。

高津：タッチラインの真ん中。ハーフラインの外側。前半は私が審判する。後半は学生にやらせる。徐々に、すべて学生にやらせるようにする。メンバーチェンジは、基本的に、前半と後半でやる。最近、フットサルのように、随時、自由に入れ替わる、という傾向が出てきた。新しい現象で、共通のルールが出来ればいいと思って、今日はやらせている。今までは前半と後半で入れ替え。メンバーチェンジについては、学生のなかには「15人にしてもいいじゃないか」という意見があるが、「それはサッカーではない」といっている。コートが狭いこともあるが、そうすると、蹴れば必ず誰かにぶつかる、ということになる。今までは習慣的に、まず、ミニサッカーから入っていたが、「11人でやらせろ」という意見が出る。その後は、なぜ11人に限定するのか、もっと多くてもいいではないか、という意見が出て来る。教師と学生のヘゲモニー闘争になる。「15人までやらせろ」と言ってくれば、「おまえらそれはサッカーか」と突っぱねる。体を動かして汗をかくのが目的なら、15人でもいいけど、ゲーム展開をしていくとなると、無駄な空間がないといけない。(授業中のゲームを写したビデオの映像を見ながら、「コート全体を広く使ってプレイをしている。10年前とは違う。ポジショニングができています。」)

坂：バスケットは、7人となったら学生の方がいやがる。狭いというのもあるので、増やすということにはならない。ルールを緩和しようとする、それはバスケではないという。サッカーの経験者の方が、スポーツ方法に対して柔軟な考えを持っているように思う。より楽しもうとしているのか。

尾崎：種目特性で変わるのか。その授業をとっている学生がどのようなスポーツ経験を持っていて、何割いるから変わるのか。授業の目標とか課題を設定するとき、一体何が影響力を持っているのかということになる。高津先生も「サッカーをやることとテニスやることと違うんだよ」ということを明確に言われた。そうすると、その違いは種目が違うからなのか、やっぱりどんな学生がいるのかと言うことなのか。授業の目標なり課題は、ある程度教師があらかじめ設定するという、今のシラバスでは鮮明にすることであれば必要になってくるんだけど、どんな学生が集まってくるかで目標課題がどうなのかということがあるし、マッチングがどうなのかということもあるし、ミスマッチがあれば直せばいいんじゃないかということもあるし、やっぱりでも最低限ここをおさえなければならないというファンダメンタルな部分もあるという、どんどん話がつながっていくんだろうと思うんですが。当然マニュアル化するのは無理だけど、種目特性のようなものを、何がどんなのかを、整理して、おそらく議論を引き継いでいくポイントかなと感じた。

<一期一会の授業>

高津：1回限りの授業。学生が違うから。その都度、バック、フォワードのテクニックが全然違う。だから、その時にバックとはこういうものだとして教えたとしても、ある程度までしかやれないんで、むしろ一期一会という感じ。それでいいんだと思うけど。全くバラバラではいけないから、そこで自分の考えることと学生の考えとをやり合うことはいいと思うんだけど。基本的には学習は学生の自己運動として展開する。これがなければ授業はなり立たない。そのように指導するのが教育というもの。そういうことは、日本の70年代の教育学の理論水準。理論的・原理的にはわかっていても、実際にはやっていなかった。本当に理解していなかったということで、私も同じだナーと思ったわけです。(渡辺君のおかげで気づいたんですか? - 笑い)前から気づいていたけど、めんどいから、今年は最後だし、学生の言うことも聞いて、楽しく終えたい

と思った。それがきっかけです。最後に学生と握手して、万歳で胴上げでもして終わってもらいたい、という感じです。今学期終わって見ないと、うまくいくかどうかはわからないが、初回と今日2回目は大成功。教師がやれというのと、学生のなかから、「もっとしっかり動けよ」という声が出るのとでは、全然違う。

坂：それはゲーム-練習-ゲームという形態なのか、それとも学生が提案してきたことに対して来たことで活性化したのか、どちらか。

高津：学生が自分たちでやったことだと思う。学生に提案をさせて、それに対してネットで意見を求め、それに私がコメントしたりしてきたことがあると思うけど、基本的には彼らのやったことです。提案してきたことに対して、私がコメントしながら冬学期をむかえた、ということはある。ネットを見ていない者も一杯いるし。そういうやりとりのなかで、変わっていくんだと思う。ほっといて出来るかどうかはわからない。1回限りのことなのかもしれない。

坂：彼らの提案したことを彼らにさせたことで自主性が出てきたということですか。一チームではなくて全員ですか。今年度の総括のアンケート調査で報告してください。

(2009年3月13日 文責：高津勝)

[付記]

この実践交流会は2008年10月21日の午後、スポーツ科学研究室で行われた。その後の冬学期の授業の展開については、渡辺富子助手の協力を得て、ホームページ上に各授業時のグループ活動の結果やゲーム批評を掲載することにし、それを履修者に読んでもらい、授業の成果や課題を共有するように努めた。その内容については、資料9を参照されたい。資料9のなかにある、すなわち、HPに掲載した各授業時のゲーム中の「サッカーの心電図」については、私が授業中にゲームを観戦しながら作成したものである。HPづくりをはじめ、そうした作業を、部活動で怪我をし、長期見学を余儀なくされた学生などの協力を得て、受講者自身が作成するようになれば、こうした授業は、より能動的で創造性に富んだものになるだろう。

「サッカーの心電図」は、小学校教師で、民間教育研究団体である学校体育研究同志会の会員であった根本忠紀が考案したもので、私も1970年代半ばから80年代初頭にかけて、体育同志会のサッカーの指導法や運動文化論の成果を参考にしながら授業実践を展開した(学校体育研究同志会(編)『サッカーの指導』1975年、同『体育の授業記録』1975年、参照)。

今回の交流会の質疑応答をふりかえって、悔やまれるのは、授業のなかのゲームを「似非サッカー」と揶揄する一方で、社会のなかのサッカーを美化しすぎたのではないかと、ということである。社会的現実としてのサッカーのクラブやチームの活動は、とりわけ日本の場合、「等質集団」、すなわち能力別に編成ないし組織されており、多様な経験や能力、興味関心や動機をもつ人びとを広範に結集しうる開かれた体制になっていない。したがって、授業のゲームのなかにこそ、勝敗主義を乗り越えた、人間性に満ちた人と人とのつながりが出現する、ということもできるのである。その意味において、「スポーツ方法」を契機に、社会のなかの人間とスポーツのあり方を改革する、という展望を担保しておくことが重要だと思う。

なお、実践交流会の質疑応答の最後に坂先生から要請された宿題、すなわち、教育部が年度末に行う「授業に関するアンケート(2008年度)」調査の際に、このサッカーの授業について報告せよという課題については、(資料10)のようなかたちで対応させてもらった。不十分であるが、お許し願いたい。

最後に、今回のような授業実践を体験することができたのは、渡辺富子・関根美智子両助手の多年にわたるサポートのおかげであった。彼女たちのサポートがなければ、私のような杜撰な教師が33年間も大過なく授業を続けることはできなかったのではないかと考えている。この場を借りて、感謝の意を表したい。

資料

【授業計画 2007 年度】

2007 年度 スポーツ方法 (サッカー) 火 1 限

4 / 2 4	6 / 0 5
5 / 0 1	/ 1 2
/ 0 8	/ 1 9
/ 1 5	/ 2 6
/ 2 2	7 / 0 3
/ 2 9	/ 1 0
	/ 1 7

サッカー 2007 年度 (火曜、1 限、冬)

回数	月日	当番		
1	10月2日	各班	体ならし。3対1。4対2。	班内ゲーム
2	10月9日	2班	シュート(2対0)(2対1)	班対抗
3	10月16日	1班	シュート(3対0)(4対0)	班対抗
4	10月23日	2班	班別自主計画(1)	班対抗
5	10月30日	1班	班別自主計画(2)	班対抗
6	11月6日	2班	シュート(4対0)(4対3)	東西対抗
7	11月13日	1班	班別自主計画(3)	班対抗
8	11月20日	2班	班別自主計画(4)	班対抗
9	11月27日	1班	班別自主計画(5)	班対抗
10	12月4日	2班	シュート(4対0)(4対3)	東西対抗
11	12月11日	1班	班別自主計画(6)	班対抗
12	12月18日	2班	班別自主計画(7)	班対抗
13	1月8日	1班	班別自主計画(8)	班対抗
14	1月15日	2班	班別自主計画(9)	班対抗
15	1月22日	教室	まとめ。レポート作成	

授業に関するアンケート（2007年度） - 回答 -

2008.1（高津 勝）

1. 授業について

（授業概要や今年度の新しい試み、学生の反応・変化について感じられたこと等）

スポーツ方法（サッカー：火1） 登録人数：40 履修人数：40

- ・履修者の学部別構成は、商学 11 人、経済 10 人、法学 7 人、社会 12 人。全学部に分散しており、各部の垣根を越えた交流というスポーツ方法の趣旨にふさわしい受講者の構成であった。
- ・オリエンテーションのときの調査によれば、
 - (1) サッカー経験
授業のみ 10 名、部活動経験 15 名、その他、となっている。
 - (2) サッカー部経験者が受講者の 75% を占めているが、そのうちのほとんどは 4 年以上経験者で、受講者全体で 4 年以上サッカーの部活を経験した者が半数を占める。受講者の 30% 弱が、大学でも組織的にサッカーやフットサルを行いたいと希望していることになる。
 - 1~2 年間、5 名
 - 2~3 年間、2 名
 - 3~4 年間、2 名
 - 4 年以上、20 名
- ・以上から、経験者と非経験者との個人技やコンビネーションプレイの構成力に大きな差がある。この溝の克服が、授業を成功させるための第 1 の鍵。その次の鍵は、経験者の上層部分を本気にさせること（やる気を起こさせること）。
- ・したがって、最初に伝えた授業のモットーは「未経験者や経験者に関係なく、ともに上手くなり、いいチームを作り、楽しいサッカーをめざすこと」。
- ・大学での部活・サークル加入希望者調査では、運動部やスポーツ系サークル希望者が 70% 以上いた。入学時、組織的なスポーツ活動への要求がきわめて旺盛であることがわかる。そのうち、サッカー系競技については、フットサル 6 名、サッカーサークル 4 名、サッカー部 1 名となっている。
 - フットサル、6 名
 - ボート部・テニスサークル・サッカーサークル、各 4 名（計 12 名）
 - 自転車部、2 名
 - サッカー部、ダンス部、ラクロス部、アメフト部、陸上部、ワングル部、バスケットサークル、ソフトボールサークル、パドミントンサークル、各 1 名（計 9 名）
 - 文化系、1 名
 - 未定、6 名
 - 加入希望なし、5 名
- ・授業は、夏学期は 4 班（第 1～第 4 班）の異質集団編成によるミニサッカー主体とした展開、冬学期は 2 班（A 班と B 班）による 11 人制サッカーを主体とした展開で、1 コマの時間内でのゲームの時間配分は、夏学期は 3 分の 1、冬学期は 3 分の 2 とした。
- ・夏学期の後半と冬学期は、受講者の自主的練習計画の作成を重視し、グループノートの作成に留意

した。昨年までは、グループノートの作成はうやむやに終わっていたが、今年は時間内に記入させるように指導したことが功を奏し、成功したといえる。

- ・班編制については、夏学期と冬学期の連続性に留意した（夏第1班+夏第4班=冬A班。夏第2班+夏第3班=冬B班）。ただし、連続性・継承性があったかどうか、不明。なお、班活動のマンネリ化を防ぎ、また、多様なプレイスタイルの開発を意図して東西対抗戦を実施した。
- ・雨天に欧州サッカーのドキュメンタリービデオを見せ、現代サッカーの社会的動向について問題意識を喚起した。
- ・サッカーの質としては、スピード、パワー、正確性に劣るが、インターハイの各県代表レベルのゲーム（ゲームの構想力とパスの展開）に近いと自負している。
- ・今後の課題として、以下の諸点を挙げておく。

練習方法の多様性の探究

フォーメーション練習の拡充

グループ活動のマンネリ化を防ぐ手だての探求（たとえば、3班編制など）

学生の主体性・創造性の発揮（自学自習と授業内班意識の克服。サークル型へ。）

技術認識と社会認識の結合

- ・学生の感想（期末レポートより抜粋）

- (1)「サイドからの攻撃を重視、またそれだけにこだわらず、時には中央突破から抜けていくなど多面的な戦術を展開できたように感じる。それが必ずしも成功していたとは言い難いが……。とにかく厳しすぎず、ゆるすぎず、みんなで楽しくプレーしながら、なおかつ集団プレー技術が向上した点は何よりもよかったのではないか。」(根本)
- (2)「11月頃まではポジションを決めずに、流動的にやっていたのでイメージが一致した日と一致しない日とではゲーム内容にかなりの差があった。・・・練習では、経験者を中心に12月以降ボール回しなどシュート練習よりもパスサッカーのための練習に時間を使い、一定の成果を上げられたと思う。・・・また12月以降にはポジションをある程度決めて試合に臨んだので、対タイの試合は試合としての形をとれていたと思う。主な要因は守備意識の向上。」(堤)
- (3)「チームの特徴としてまず注目すべきは、やはり個々の能力の高さだと思う。正直、自分が所属するサッカーサークルに是非は入って欲しいという逸材がうちのチームにはたくさんいたし、全くボールを扱えないという人は1人もいなかったことに驚いた。」(宮谷)
- (4)「やはりサッカー経験者と初心者の中で溝があったように思われた。...冬学期も終わりに近づくにつれて、練習も徐々に真剣味が増し、チーム内で話し合うことも増えていき、本当に1つのチームとなっていくように思われた。今まで小・中・高と体育の授業を受けてきたけど、こんなにチームでまとまって1つの競技が出来たのは初めてだったので、楽しかった。」(森本)

資料

スポーツ方法（サッカー、火1限）を受講しているみなさんへ

- (1) 渡辺大和(社会学部一年)君の「提案」「練習計画案」を読み、賛同・反対・修正意見を、7月末までに下記のメールアドレスへ送信してください。それらの意見は、逐次、匿名にて、「提案を受けて」の欄に紹介します。
- (2) 私としては、渡辺案の趣旨はよく分かるが、「計画案」そのものの緻密性に欠ける、という感想を持ちます。さしあたり、渡辺提案を、授業の「前段」でゲーム、「中間」にミーティングとチーム(グループ)別課題練習、「後段」にゲームという提案であると理解しておきます。
- (3) 今回の渡辺提案と皆さんの意見は、冬学期の授業展開に活かして生きたいと思います。積極的に、意見を寄せてください。

以上です。

2008年7月18日 高津 勝

練習計画案

渡辺(社会学部一年)

効率の良い練習とは

そもそも効率の良い練習とは何か。自分は目標達成に最短距離で近づいていける練習のことだと思える。今回の授業で先生が掲げた目標は「パスサッカー」であるから、限られた授業時間の中で、ただでさえ実現に時間がかかる「パスサッカー」を、如何に形にしていけるか。そこが問題になってくる。

「パスサッカー」

では、「パスサッカー」に必要な要素とは何だろうか。自分は大きく分けて以下に示す三つの能力が必要だろうと考える。

トラップ、パスなどの個人的な能力

ボールをもらうための動きの習得

チームでの「イメージ」の共有

については、短時間で習得はほぼ不可能に近い。多少の改善は見られるだろうが、限られた授業時間の中で「パスサッカー」を目指すのであれば、これは個人練習に任せるしかないだろう。確かに、を欠いての実現は難しいことかもしれないが、目標実現のためにはやむをえないだろう。それに、この授業に出ている人たちはサッカーの基礎は出来ている人が多いように思う。個人的には、については問題ないと考えている。

「パスサッカー」を実現していくうえで最も大切なのはである。ディフェンスのプレッシャーが厳しくなっている現代サッカーにおいて、一試合90分のうち、個人がボールを持っている時間は、長い選手でも三分程度と言われている。では、残りの87分は何をしているのか。ボールをもらうための準備に、その時間のほとんどを費やしているのだ。ここだけを見ても、「パスサッカー」実現のためには、オフ・ザ・ボールの動き方が重要性であることは言うまでもない。

そして、が達成されると、次にを完成させなければならない。オシム ज्याパンでおなじみの「考えて

走るサッカー’である。しかしこれは、 が完成すればあとは時間の問題だ。 のオフ・ザ・ボールの動きが複数人で連動して起こるのがこの である。

例えば、先週の時間で、先生は目立った選手として青チームの三者手を挙げられた。たしかに、両チーム合わせてみてもあの三人はうまい。が、青チームは赤チームよりも決定機が少なかった。それは、あの三人は‘出し手’であって、‘受け手’ではなかったからである。一方、赤チームにはボランチの二人の‘出し手’に対して、両サイド、両FWが裏のスペースを狙っていくことで、多くの決定機を生み出していた。ボランチの二人には複数のパスコースがあった。赤チームに‘出し手’に加えて、‘受け手’にもいい選手がいたのだ。よって、先週の試合は ・ の点で勝っていた赤チームの勝ちであったのだ。

練習計画

では、以上の項目を実現するためにはどのような練習がいいのか。いろいろ考えた結果、自分は‘実践練習’を提案したい。

第一に、 ・ の習得は、実践を抜きには有り得ないからだ。

第二に、現状からして、試合前の練習ほど意味のないものはないのではないだろうか。

自分が見たところ、数人しか、先生の指示にしたがった練習をしていない。それなら、試合時間を増やしたほうがいだろう。

第三に、モチベーションの問題だ。やはり、サッカーにおいて一番楽しいのは試合ではないだろうか。これから冬季になれば朝起きるのはつらくなるだろうし、欠席・遅刻者の増加は目に見えている。(自分が言えたことではないが...笑) 試合を中心にすることで、スポ方に対するモチベーションが高まり、欠席・遅刻者の増加を妨げることが出来るのではないか。

しかし、‘実践練習’中心だからといって、無闇に長い時間試合ばかりをしていても仕方がない。ハーフタイムや試合後などに、チームで話し合ったり、必要であれば、練習に時間を割いたりして、試合での出来に合わせて適当な練習メニューを組んでいくことが必要だ。

‘実践練習’を練習の中心にすえて成功を有名なチームに野洲高校がある。野洲高校では、徹底的に試合形式の練習にこだわり、走りこみなどのトレーニングはほとんどやらなかったそう。自分は野洲高校が鹿児島実業を破って初優勝を成し遂げた試合のことを良く覚えている。野洲のサッカーは「パスサッカー」を中心に、個人の創造性を最大限にひきだした、まさに‘セクシーフットボール’そのものだった。

「パスサッカー」をベースとしたセクシーフットボール この授業で目指すべきお手本ではないだろうか。

意見提出者：到着順

1. 斎藤(法) 2. 江藤(商) 3. 新井 4. 山本(法) 5. ペター(商)
6. 斎藤(商) 7. 田島(商) 8. 寺田(社) 9. 岡本(法) 10. 白本(経)
11. 匿名(商) 12. 近藤(社) 13. 中嶋(社) 14. 宮崎(経)
15. 吉田(経)

<コメント：高津>

以上をもって、意見の集約を終わります。冬学期の課題は、<「チームづくり」から「自主的なスポーツ集団づくり」へ>です。練習計画の作成と遂行、ゲームの企画運営、チームづくり、仲間づくり、授業全体の企画・運営への積極的な参加を希望します。(8/20)

資料

2008年冬学期サッカー(火1)予定

高津 (2008/10/07)

回数	月日	備考
1	10月7日	
2	10月14日	
3	10月21日	
4	10月28日	
	(2008/11/4)	一橋祭
5	11月11日	
6	11月18日	
7	11月25日	
8	12月2日	
9	12月9日	
10	12月16日	
	(冬休み)	
11	1月13日	
12	1月20日	
13	1月27日	教室 28番

われわれがめざすもの(冬学期の目標) スポーツ方法 (サッカー)

2008年欧州選手権				
	スペイン	(1試合)	ドイツ	(1試合)
得点	12	2	10	1.7
失点	3	0.5	7	1.2
パスの本数	3415	569	2845	474
成功率	81.33%		76.33%	
シュート	117	19.5	62	10.3
うち枠内	51	8.5	24	4

注1)全6試合の集計

注2)決勝=スペイン vs ドイツ(1:0)

注3)6月29日、ウィーン

出典:『朝日(夕)』2008.6.30

資料 (冬学期の展開(1)～(8)(2008年度) - HP 掲載再録 -)

(スポーツ方法 (サッカー、火1限)を受講しているみなさんへと渡辺君の提案(2008年7月18日)は、資料 参照)

* * 提案を受けて(各自の意見)(到着順)

渡辺君に対する意見 - その1 (2008.7.21現在)

(1) 齊藤(法)

私は、渡辺君の意見に賛成です。

今まで前期の授業を通して、先生が行ってきた3vs1、4vs2はパスサッカーを目指すのにとっても効果的なものだったと思います。なぜなら、これらの練習はパスコースを作ること、パスコースにパスを通すことの基礎を作り上げる練習だからです。

私は、今までの練習をしてきて、私も含めた周りの生徒たちにこのような基礎がほしい身についたように思います。しかし、実戦ではそこまでパスがつかない現状にあります。それは、人数が多く、プレッシャーの強く、常に流動的である実戦に慣れていないからではないでしょうか？実戦を通し、動き方を身をもって学び、そしてそれを各々が反省することによって、これからのレベルアップが図られていくと私は思います。

よって、渡辺君の意見に私は賛成です。

(2) 江藤(商)

まずどういう練習をすべきかについての前に、一つ一つの練習に意識を持って取り組んでいない。例えば3対1、4対2。経験者とそうでない人がいるので仕方ないが、経験者は言わばそういう練習は『余裕』であると思う。初心者に合わせるような練習、つまり初心者に上手くなってもらうような考え方がスポ方の根幹にあるならそれでもいいが、経験者にもサッカーの上達を望むならこの練習方法では上達は望めない。

その点ゲーム形式の練習を見てみると、経験者にも初心者にも上達が望めると思われる。初心者にボールが回らないという点が危惧されるかもしれないが、経験者のアドバイス、個人の上達したいという意識によって改善されるものである。

またチームプレーによってコミュニケーションが取れるし、スポーツを通して人とつながるということにもなると思う。競争意識が高められる、モチベーションが上がるといった渡辺の提案の中にあつたこともその通りだ。

よって僕は渡辺の提案に賛成し、試合形式をもっと取り入れるべきであると思う。

<コメント(高津)>

3対1、4対2のボール・キープの練習には、初心者からプロの選手まで全てのプレイヤーに要求される原理・原則が含まれている。ただし、問題は、その練習と実際のゲーム=実践との関連性をより意識的に追求する必要があること、さらに、この練習を多くの人が「意識を持って取り組んでいない」ことにあり、それらの問題を克服する必要がある。

また、3対1、4対2のボール・キープの練習の限界かどこにあるかといえば、この練習ではシュートおよび、それにつながるパス展開が学べないことにある。冬学期は、その点を補完する必要があると思う。

なお、「試合形式をもっと取り入れる」という点については、冬学期はそのつもりであり、君の意見を尊重したい。

(3) 新井

僕は授業の進め方に対して、渡辺君に賛成です。

授業でやるゲームの中だけで、「パスサッカー」ができるようになれるとは思わないが、少しコミュニケーションをとる時間があると意識やイメージの共有に役立つと思う。

冬学期の目標が「チーム作り」なら、なおさらそのコミュニケーションの時間が大切になると思う。しかし、みんな試合が終わると早く帰りたくなるので、授業の終わりにやることはなかなか厳しいと思う。その点でハーフタイムにやることはいいと思う。

<コメント(高津)>

「ハーフタイム」をミーティングの機会として位置づける提案については、良案かもしれない。他の人の意見も聞きながら、みんなで決めたいと思う。

(以上、7月21日 PM10:00 現在)

渡辺君に対する意見 - その2 (2008.7.23現在)

(4) 山本(法)

今回の案では、先生のご指摘のとおり、具体性にかける感は否めないと思います。ですが、当該練習内容の趣旨および目的は、十分に説得力のあるものです。

11人制のチームに、1チームあたり15~16人程度いるので、その中でグループに細分化し、オフェンスとディフェンスに分かれ、ハーフコート内を広く使い、実際の攻撃に近い形で、ボールをもらう動きやパス出しの練習を行うことが、この練習趣旨に合っているのではないかと思います。

またその1プレーごとに細かくミーティング等行うことで、自分も含めた、サッカー経験の少ない者にも、経験者に近い形で意思疎通が図れ、結果として、渡辺くんが提案している目的に近づけるとと思います。もちろん、いちいち集まるのは時間の浪費となるので、その場での感想や、動きの支持ができれば、ベターだと思います

細かい練習内容としては、一人ひとりのトラップ回数を制限することや、ハーフコート全体を使って、3対1や4対2を発展させ、4対3や5対3などがいいのではないのでしょうか。

<コメント(高津)>

1つのチーム内をオフェンスとディフェンスのグループに分けることに賛成。ディフェンス・ラインが安定すると、ゲームが引き締まり、チームも安定する。前方へのフィード(パス)も正確になり、意図的なゲーム構成が可能になる。ただし、これまでのゲームを見ていると、前半にオフェンス、後半にディフェンスとして出場する者もいるので、上述のグループ分けを基本にしなから、実際の練習では、柔軟な運用を図るようにしたらよいと思う。そのようなチーム運営ができるように、是非、みんなに工夫してもらいたい。

(以上、7月22日 PM9:00 現在)

渡辺君に対する意見 - その3 (2008.7.29現在)

(5) ペター(商)

私は全体的に渡辺君の意見に賛成である。たしかに、パスサッカーを実現するためにトラップ、パスなどの個人的な能力、ボールをもらうための動きの習得、チームでの「イメージ」の共有は不可欠である。私の個人的パス能力は弱いから、夏休みに帰国した後で毎週何回もパスの練習をするつもりがある。

渡辺君は書いているように目標を達成するためにモチベーションもとても大事なポイントの一つである。私もその意見に賛成である。

夏学期に練習した3対1や4対2の練習は効果的で良かったと思う。初心者である私にとってそんな基本

的な練習は大事だと思う。

私は「効率の良い練習とは」という部分に賛成であるが、練習計画案はあまり具体的ではないと思う。冬学期のスポーツ方法を楽しみにする。

<コメント(高津)>

夏休みのあと、うまくなったペターを是非、見てみたい。が、まずは、ゆっくり遊んでください。(以下略)

その4 (2008.7.31現在) - 略

その5 (2008.8.20現在) - 略

われわれがめざすもの

2008年9月30日

2008年欧州選手権				
	スペイン	(1試合)	ドイツ	(1試合)
得点	12	2	10	1.7
失点	3	0.5	7	1.2
パスの本数	3415	569	2845	474
成功率	81.33%		76.33%	
シュート	117	19.5	62	10.3
うち枠内	51	8.5	24	4

注1)全6試合の集計

注2)決勝=スペインvsドイツ

注3)6月29日、ウィーン

出典:『朝日(夕)』2008.6.30

冬学期の課題は、<「チームづくり」から「自主的なスポーツ集団づくり」へ>です。

練習計画の作成と遂行、ゲームの企画運営、チームづくり、仲間づくり、授業全体の企画・運営への積極的な参加を希望します。

冬学期の展開(1)

2008年11月11日(当番=青)

試合結果 赤1 青2(前半:赤0 青1)

(後半開始5分間)

	・	＼	＼/	＼＼	＼＼/	合計	シュート数
赤	2	3	2	1	0	8	1
%	25	38	25	13			
青	4	1	1	1	1	8	0
%	50	13	13	13	13		

[ゲーム批評]

・青の勝利。白本ら、早朝からやる気十分だった。4人の広角的なダイヤモンド(ひし形)ができていて、今後のさらなる発展を期待する。ただし、バックラインがときどき手薄になり、中央突破やサイド攻撃を許すことがある。

・後半の最初は、赤のパスがよくつながった。

・初心者もミスを恐れず、自信を持って自分の意図したプレイをすること。そうすれば、他のメンバーにも、

その人が何をしたいのか、伝わる。その繰り返しによって、チーム内で互いの意図が通じあうようになり、コンビネーションプレイが成立する。

- ・両チームとも、フリーな空間にパスを出し、それをフォローしてパスをつなぐようにしてほしい。
- ・全体的にボールをもらいに行く動きが少ない。ゲームを単にながめているだけのプレイヤーが多いからだ。

[赤] コーディネーター松岡（朝練のため遅刻）

- ・キーワード：サイドからくずす。青はバイタルエリアがよく使える。
- ・来週の課題：中盤からFWへの展開。サイドからの展開。

見学者（中嶋） ・キープレイヤの欠席が目立つ。サイド攻撃が少なく、中央突破に頼りすぎ。

見学者（岡本） ・数的に有利な状態を作る。相手のパスコースを限定し、追い込む。 ・声を出す。

[青] コーディネーター高橋

- ・決定力をあげる（ラストパスとシュート）。
- ・来週の課題：センターリングの精度。中盤でのショートパス。

見学者（柳下） ・幅広い攻撃ができていた。

冬学期の展開（2）

11月18日（当番＝赤）

試合結果 赤2－青1（前半：赤1－青1）

（前半開始3分～8分）

	・	∖	∕	∕∖	∖∕	合計	シュート数
赤	7	6	2	0	1	16	
%	44	38	13		6		
青	6	4	2	3	1	16	1
%	38	25	13	19	6		

[ゲーム批評]

・前半・後半とも、スピード感、利用するスペースの広さ、中盤の奪い合い、サイド攻撃など、これまでで最高の試合だった。

・赤の勝利。2点目の渡辺のロングシュートは、思い切りの良さによるもの。めったに見られるシーンではない。が、青は、ちゃんと記憶にとどめ、チェックすることを忘れないように。

・青は、 、 、 が攻撃によく絡んでおり、今後の連携プレイを期待する。22 = 右FW（またはサイドバック）のポジションがよく、たまにいいボールが出るが、フォローがない。 = BKに安定感あり。新スター誕生というところか。近藤と2枚でBKラインに安定感が出てきた。

・赤は、 、 、 が中盤でよくボールに絡んでいる。が、 はもっと積極的にボールに絡み、ゲームを組み立ててほしい。 はもっと触球数を多くするように。

・両チームの課題：得意な攻撃のパターン（連携プレイ）を作ること。統制のとれたバックラインを作ること。以上の2点を、それを全員のものにする。

[赤] コーディネーター：安藤

- ・キーワード：パスを受ける動きを積極的に行い、声を出してボールを呼ぶ。
守備面では、声を出して各人のマークを確認する。

・来週の課題：「サイド攻撃 + α」

見学者：櫻井 ・両チームとも守備がちゃんとしていて、サイドにボールが展開されることが多かった。

...クロスを上げる攻撃の形が多かったが、つめる人数が足りず、得点に結びつかなかった。

[青] コーディネーター：宮崎

・キーワード： サイドをうまく使う。 中盤とDFの間延びの修正。 シュートの決定率の向上（とくに短いセンターリング）

・来週の課題： 間延びをしない。 シュートを打つ。 攻撃の人数を増やす。

[チームの組織・運営]

・ゲーム中のコンビネーション・プレイだけでなく、チームづくり（組織運営）にも留意すること。

冬学期の展開（3）

11月25日（当番＝青）

試合結果 赤2 青（前半：赤1 青0）

（前半開始10分～15分）

	・	＼	＼／	＼＼	＼＼／	合計	シュート数
赤	4	3	1	1	0	8	
%	50	38	13				
青	1	3	3	1	0	9	
%	11	33	33	11	0		

[ゲーム批評]

・経験者の出席率が悪かった。全体的に、両チームともボールにひきずられ、真ん中に集まりすぎ。広がりが無い。大きな展開がない。ただし、パスの繋がりはずマズ。みんな繋ごうと意識していた。

・赤のMF(12)、(2)の攻撃参加が有効だった。

・青は、(22)、(9)の両FW（アウトサイド）のポジションよし。MF(6)の貢献度もあり。ただし、今日のゲームは、なんとといっても、センターバック柴崎に負うところ大であった。両サイドBKは、ミスをしたあと、ただ漠然と突っ立っているだけでなく、速やかに帰陣し、つぎのプレイを考えること。

[赤] コーディネーター：山本

・キーワード：中盤の突破と決定力

・来週の課題：広くフィールドを見て、逆サイドへの展開やスペースへの動き、そこへの供給を考える。

[青] コーディネーター：栗島

・キーワード：常にシュートを意識する。守備は早めにつめて、打たせない。

・来週の課題：動いてスペースを作る。自分だけがもらう動きではない。

攻守とも、味方がどういう動きができるのか、予測して対応する。

・見学者：鈴木 2～3以上パスがつながることはまだ少ないように感じた。

[チームの組織・運営]

・チームづくり（組織運営）仲間づくりに留意する。

・陸上競技場のフィールドは水はけがよい。前夜は雨でも、朝、雨があがっていればプレイできる。そのことを忘れないように。

冬学期の展開（4）

2008年12月2日（当番＝青）

試合結果 第1試合 赤3 - 青0（18分）

第2試合 赤2 - 青1（18分）

（前半5分～10分間）

	・	＼	∨	∨∨	∨∨∨	合計	シュート数
赤	3	5	1	0	2	11	2
%	27	45	10		18		
青	6	3	0	1	2	12	0
%	50	25		8	16		

[ゲーム批評]

- ・赤の攻撃はサイド攻撃あり、中央突破あり、と、なかなか多彩だった。とくに、赤(22)と赤(4)の右サイドのコンビネーションに将来性を感じた。ただし、赤(4)は、より正確なクロスを求められる。
- ・赤(10)の得点機にからむ機敏な動きが光った。青は、CB 近藤の守備だけでは守りきれない。赤(10)の攻撃参加をチェックする必要あり。
- ・赤のバックラインは、徐々に、コントロールの成熟度を増しつつある。ただし、だれが声を出してシキルのか、役割を明確にする必要がある。
- ・後半、青の高橋が奮闘し、右サイドの攻撃も見られ、また普段以上に宇佐川がFWで頑張ったが、中盤の繋ぎ役がいないと、厚みのある攻撃は難しい。
- ・総じて、前半は赤の圧勝。後半は赤の実力が証明されたということか。ただし、後半は青も善戦した。折を見て、皆でビデオで確認することにしよう。

[赤]

コーディネーター：斎藤

- ・キーワード：パスの成功率の高さを得点に繋げる。
- ・練習：クロスからのシュート
- ・成果：サイドからの突破とそのフォローがよくできていた。

見学者（李武） ・赤が終始ゲームを支配し、サイドを広く使って相手を崩していた。

[青]

コーディネーター：打越

- ・キーワード：速いパス回しとDFのカバー
- ・練習：中央突破からのシュート
- ・成果・課題：赤(10)にやられた。皆なよく走った。攻めるとき、枚数を増やす。

見学者（黒田）

- ・周りの動き出しが遅く、パスが繋がらない。
- ・ボールにつられ、マークが見えていない。
- ・赤はサイドをよく使っていたが、そのあとのフォローがもっとあれば理想的。前線からのプレスが効いていた。

[今後の重点課題]・チーム作り（組織・運営・統括）とスポーツの自治

[今後の予定]

- ・12月9日：東西対抗。9時10分、キック・オフ。
- ・12月16日：フィールド
- ・1月13日：フィールド（班対抗）
- ・1月20日：フィールド（班対抗）
- ・1月27日：28番教室（レポート作成）

冬学期の展開（5）

12月9日(当番=赤)

東西対抗戦

試合結果 東0-西2

第1ゲーム(15分) 東0-西1

第2ゲーム(15分) 東0-西1

第3ゲーム(15分) 東0-西0

[ゲーム批評]

[西]

・チームワークの起点は、安定したバックラインを作ることから。その点で、西はセンターBKの(15)、(13)を中心に安定感があった。RB(9)とLB(11)もがんばっていた。OL(12)の動きも、なかなか良い。ただし、チームメイトとのコミュニケーションが必要。

・得点のチャンスが多くあったが、つめがあまり。

・第3ゲーム、(6)(6)(10)の右サイドの攻撃力に期待感あり。

見学者:(柳下)

・西に比べ、細かいパスをつなげなかったが、少ないパスでシュートチャンスをつかんでいた。また、コートを広く使っていた。

[東]

・チームとしてのポジションの確認、戦術的な合意が見られなかった。

・第1ゲーム、中原のOLのトップスピードでボールを受けるプレイが鮮やかだった。もっと、どんどん、あのようなプレイを見せてほしい。

・タテのスルーパスを狙いすぎ。トップにあて、それを起点に中盤が押し上げて厚みのあるプレイをするような展開がほしかった。

・中盤の(13)(10)(8) ややあって、(14)がゲームにからんでいた。

見学者:(黒田)

・第2ゲーム:中盤での西のプレスのため、攻撃を組み立てられなかった。サイドを使う意識はあったが、フォローが少なく、フィニッシュまで行けない。

[その他]・更衣室で盗難があった。貴重品は絶対に更衣室に置いたままにしない。

・来週から、バックをグラウンドに持ってくるように。

冬学期の展開(6)

12月16日

[見学者のゲーム批評]

<宮崎=青>

・サイドの攻撃を使っているが、中の寄せの枚数が少ない。

・前線でのプレスが速いから、相手が落ち着いてもてなくなっている。

・みんな楽しくやっており、よかった。

<黒田=青>

・積極的にシュートを打っていた。

・中盤にボールが入ったときのDFのフォローが少ないので、一度下げてからの組み立てがない。

冬学期の展開(7)

2009年1月13日(当番=赤)

試合結果 前半 (18分) 赤1-青0

後半 (18分) 赤1-青2

(前半開始 10分～15分間)

	・	\	∨	∨\	∨∨	合計	シュート数
赤	6	3	3	0	1	13	1
%	46	23	23		8		
青	5	3	3	0	1	12	
%	42	25	25		8		

ちなみに、高校サッカー選手権決勝のボール保有率は以下。

(09/01/12 広島皆実 vs 鹿児島西城 = 3対2)

(後半 11分～16分間)

	・	\	∨	∨\	∨∨	合計	シュート数
鹿	8	3	2	0	0	13	
%	62	23	15				
広	4	3	4	0	2	13	
%	31	23	31		15		

[赤対青のゲーム批評]

<赤>

・中原、和田の遅刻・欠席がチームのゲーム展開に与えたマイナスの影響がすべて。

<青>

・近藤、黒田、柴崎のバックラインが安定。とくに黒田は、ニュースターの出現に近い活躍。

・右 OL 打越のスピードに乗った長い距離の走り込みからのプレイが印象的だった。

・高橋のシュートチャンスをものにする嗅覚もすばらしい。

[見学者のゲーム批評]

<松岡 = 赤>

・立ち上がりは青がショ - トパスをつないでチャンスを作り、主導権を握る。赤はやや大きめのパスが目立ち、精彩を欠く。

・青の DF 黒田は安定したディフェンスをしており、展開力もある。先制の起点になった。

・青がフリーランニングを交えてピッチを広く使ったのに対し、赤は中央の密集のかなで身動きがとれていなかった。

・後半、赤のパスがつながり始めたと思ったら、2点取っていた。しかし、まだ、青が優勢なのは変わらず。

冬学期の展開 (8)

2009年1月20日 (当番 = 青)

[見学者のゲーム批評]

<季武 = 赤>

・前後半とも、両チームはサイドから攻撃し、チャンスを作ろうとしていた。

<吉田龍 = 赤>

・今日はサッカーの授業を見学し、初めて外からこのクラスのサッカーを見た。得点のパターンは長いボールを前線に入れたり、サイドからのクロスが多かった。個人的には、青の方がパスを繋いでいた気がする。

授業に関するアンケート（2008年度） - 回答 -

2009.2（高津 勝）

1. 授業について

（授業概要や今年度の新しい試み、学生の反応・変化について感じられたこと等）

スポーツ方法（サッカー） 登録人数：42 履修人数：40

- （1）学生の自主性・主体性を信頼し、彼らに年間の授業の展開について意見を出させ、それを基本にして授業づくりをした。自分たちの意見表明によって授業の仕方が変わる、という経験をする事によって、例年以上の学生の積極的な授業参加とその意欲を引き出せたと思う。
- （2）そのことによって、学生と教員のあいだの溝が埋まった。私のことを「高津さん」とか「高津先輩」と呼んだ入り、自分たちのチームのことを「高津ジャパン」などと言うようになったのは、その証だと思う。
- （3）学生の意見を聞き入れ、「練習 試合 ミーティング」という従来の授業展開を、「試合 練習 ミーティング」というサイクルに変えた。（そうした成果が、年間の授業終了後、青沼クラス選抜との自主的な対抗試合の企画まで発展した。）
- （4）渡辺さんの協力を得て、夏学期終了時からHP「スポーツ科学研究室」にこの授業に関するサイトを立ち上げ、授業の進め方や各時の授業展開（グループノート記載事項の要点、見学者のゲーム批評、教師によるゲーム分析と批評など）の情報を提供した。全員が活用したわけではないが、それなりの刺激を与えた。なお、期末レポートにHPの記載事項について、感想を書かせた。
- （5）1限は早朝、および2限目との関係で、授業の進め方について学生とゆっくり話し合ったり、ミーティングしたり、組織化をする時間を十分とれない。開講時間帯という点では、昼休みに食い込むことの可能な2限、あるいは3限開講がベストだろう。